



高齢社会の手本となる貝原益軒（一六三〇—一七二四）

藩士として業績のあった人物

貝原益軒は生涯に約六〇部（二七〇余巻）の書物を執筆しているため、作家のように理解されています。実際、菩提寺である福岡市中央区の金龍寺の境内の彫像は書籍を山積みにした座机の前面に正座する坐像であり、作家の風格です（図1）。しかし現実には一八歳から七〇歳まで筑前国福岡藩（黒田藩）に出仕した武士であり、書物の大半は引退して自由になってから執筆したもので、見事な複線の人生を達成した人物です。



図1 貝原益軒坐像（金龍寺）

一六三〇（寛永七）年に福岡藩士の貝原寛斎の五男の篤信として誕生し、一八歳で福岡藩に出仕しますが、第二代藩主黒田忠之から勘当されて浪人になってしまいます。

七年が経過して二七歳になった一六五六（明暦二）年、第三代藩主黒田光之によって勘当が解除されて帰藩が許可され、翌年から藩費によって京都へ留学し、本草学や朱子学を勉強するとともに、木下順庵、山崎闇斎など著名な学者と交遊するようになります。

七年間の留学を終了して一六六四（寛文四）年に帰藩し、一五〇石の知行を付与されますが、行政能力が優秀であったようで、藩内で藩士の教育をするだけではなく、一六八二（天和二）年に李氏朝鮮から徳川幕府への外交使節団である朝鮮通信使（図2）が藩内を通過するときの応接や隣接する佐賀藩との境界問題の解決に奔走するなど政治能力を発揮しています。さらに『黒田家譜』を編纂するなど学者としても能力を発揮しました。



図2 朝鮮通信使

人生指南をした益軒

一六九九年に七〇歳になって引退、第四代藩主黒田綱正から提供された藩内の荒津東浜の屋敷に、三九歳のときに結婚した二二歳年下の東軒とともに居住し、作家としての第二の人生を開始します。益軒が執筆した書籍には硬派の史書なども何冊かあるものの、一般に周知されているのは『五常訓』『家道訓』『初学訓』『五倫訓』など「訓」と名付けられた人生訓を内容とする一三冊ですが、とりわけ有名な著作が『養生訓』です。

これらの「訓」の内容は益軒の独創ではなく、中国の歴史に登場する聖賢の思想を背景にして、自身の体験と研究によって構築した内容ですが、さらに本人が病弱で、生涯の大半を痔疾、頭痛、眼病、淋病などで苦勞したため、それらに対処しながら長

生きした経験から執筆したという背景があります。『養生訓』は逝去する前年の八三歳のときに出版されており、もし健康で元気であれば、この名著は出現しなかったかもしれません。

その内容の一部を紹介すると「身体は自分だけのものではないから飲食や色欲にふけて粗末にしてはいけない。人間には飲食の欲、好色の欲、睡眠の欲、駄弁の欲などあり、養生の道はこれらの欲を我慢することである」「欲を減らすと命を延ばすことになる。食を少なくし、飲むを少なくし、色欲を少なくし、口数を少なくし、怒りを少なくし、憂いを少なくし、寝るのを少なくするとよい」と僧侶の修行のような内容です。

益軒の没後二五日程して『女大学』という偽作が出版されています。益軒の『和俗童子訓』を下敷きにした内容で、益軒の見解に類似していると推察されます。そこには「女には三従の道がある。父の家においては父に従い、夫の家においては夫に従い、夫が死んでからは子に従う。嫁してからは父の家に行くことを稀にしなければならぬ」と記述されています。現在では批判殺到の内容ですが、当時の社会規範を明示しています。

博物学者としての益軒

このように貝原益軒というと『養生訓』の著者として有名ですが、本質は近世を代表する博物学者です。その資質を象徴する大作が全一八巻の『大和本草』です。「本草」は薬用となる動植物の総称ですが、中国の明代の学者の李時珍が二六年の歳月をかけて編纂し、死後の一五九六年に上梓した『本草綱目』が世界最初の本草の書物とされています(図3)。全五二巻の大作には約一九〇〇種の薬種が図版とともに収録されています。



図3 『本草綱目』

この書籍は一種の百科事典で内容が斬新で図版も豊富であったため中国でも何度も印刷されていますが、中国での出版から八年が経過した一六〇四（慶長九）年には日本に到来し、次々と版刻されて刊行され、一四種類の出版が確認されているほど注目されていました。さらに原本を復刻するだけではなく、日本独自の百科事典を製作する活動も登場し、『花壇綱目』（一六六四）『訓蒙図彙』（一六六六）などが登場します。

そのような一例が益軒が日本の動植鉱物を対象に編纂した『大和本草』で、国内で採集できる薬用の動植鉱物を図入りで網羅した内容です。一七〇九（宝永六）年に刊行され、付録と図版は益軒が逝去した翌年の一七一五（正徳五）年に刊行されています（図4）。『大和本草』が明代の『本草綱目』の刺激で実現したように、鎖国をしいた江戸時代の新規の学問領域の開拓には唐船がもたらす中国の知識が重要な情報でした。



図4 『大和本草』

ところが益軒が並々ならぬ学識で発刊した日本最初の本草学書は後世の学者に影響をもたらさず、平賀源内は一七六三（宝暦一三）年に『物類品鑑』を、小野蘭山は一八〇三（享和三）年に『本草綱目啓蒙』を発刊しています。平均寿命が四〇歳程度であった江戸時代に、病弱ではあるものの現代の平均寿命に匹敵する八五歳まで活躍した益軒は『養生訓』や『五常訓』によって評価される人物ではなかったのです。

旅人としての益軒

益軒は病弱であったと紹介しましたが、大変な旅行家でもありました。現在のよう
に便利な移動手段はなく、すべて徒歩で旅行する時代に頻繁に旅行をしています。宮

仕えの時代に留学のため京都に旅行したこと以外に何度も国内を旅行し、生涯に八冊の紀行文を出版しています。明治時代初期、イギリスの女性I・バードが一人の男性の案内で江戸から蝦夷へ旅行したことが証明するように安全に旅行ができた国土だったのです。

一六八五（貞享二）年に五六歳の益軒が一人で江戸から日光まで旅行した記録『日光名勝記』を参考に、旅行の様子を紹介します。日付は記録されておらず正確な月日は不明ですが、芭蕉が『おくのほそ道』の旅行に出発した四年前のことです。現在、隅田川には鉄道橋や自動車専用橋を除外すると二五本の橋梁がありますが、益軒が日光に出発した時点では千住大橋と両国橋の二本しかなく、奥州へは千住大橋から出発しました。

千住大橋から奥州街道を進行して宇都宮に到着し、そこから日光街道へ分岐しますが、それまでの平坦な道路とは相違して山道になります。現在では両側は鬱蒼とした杉並木ですが、これは相模甘縄城主の松平正綱と信綱の親子が一六四三（寛永二〇）年から植樹を開始した並木であるため、当時は巨木ではありませんでした。さらに前年の年末には今市で大火が発生しており、焼跡を両側にしながらの旅路でもありませんでした。

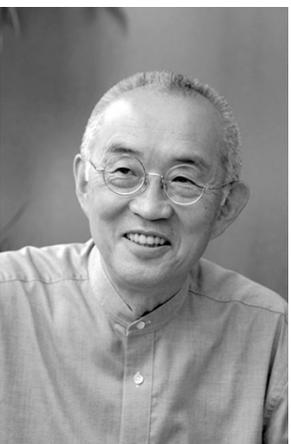
東照宮の手前の大谷（だいや）川には神橋が架橋されていますが、将軍や勅使以外は通行が禁止されており見物するだけでした。そこで徳川家康を祭神とする日光東照宮に参拝し、さらに三代将軍家光の廟所である大猷院（たいゆういん）に参詣しようとしませんが公開されておらず、大谷川沿いに山道を登坂し、中禅寺湖や男体山などを見物したと記録されています。しかし博物学者だけあり、数多くの野鳥についての生態や鳴声なども記載されています。

高齢社会の手本となる益軒

益軒夫婦には子供ができなかったので、兄の子供を養子にしましたが、益軒から昼間の生活態度だけではなく寝相にまで干渉されるために逃亡してしまったため、さらに兄の次男を養子にしますが、金銭にだらしがなく、厳格な性格の益軒は苦勞します。そこで自分が死亡して以後の養子の生活を憂慮して『家道訓』を出版します。そこでは質素と儉約が生活の基本だと強調していますが、道楽息子には効果がありませんでした。

益軒の人生を回顧すると、博物学者としては日本最初の本草学書を出版するほど優秀でしたが、女子や子供を対象にした「訓」と名付けられた多数の書物の内容は男女や長幼の秩序を重視した封建時代においては意義があったにしても、現代の視点では

時代錯誤の印象です。益軒は後半の書籍で話題になる傾向がありますが、高齢になってから学問に集中した長寿社会の先駆となる人生を実現したことを評価すべき人物です。



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002―03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカンヌとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジ―研究所）、『先住民の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジ―研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）、最新刊「AIに使われる人 AIを使いこなす人」（モラロジ―道徳教育財団）など。モルゲンWEBの連載「清々しき人々」とパーサー誌の連載「凜々たる人生―志を貫いた先人の姿―」からの再編集版として、『清々しき人々』、『凜々たる人生』、『爽快なる人生』（遊行社）など。